

中国語の“給人”と日本語の「人に」

杉村 泰

キーワード “給”、「に」、「のために」、与え手、受け手

1. はじめに

中国語の“給人”と日本語の「人に」は、行為文において物や情報、恩恵や利害の受け手を示す機能を持つ点で共通する。そのため、次の a の日本語は b の中国語のように訳することができる。

- (1) a. 私は彼に手紙を書く。
b. 我给他写信。
- (2) a. 私は彼に本を買う。
b. 我给他买一本书。

この a と b は互いに翻訳可能であり、語順も(3)のように共通の構造を取る。そのため、“給人”と「人に」は同じ意味を表しているように見える。

- (3) 動作主 (S) + 給人/人に + 行為 (VO/OV)

しかし、次の(4a)と(4b)は(3)の構造を取るにもかかわらず、互いに翻訳することができない。(4a)の「彼」が「本の買い手」を表すのに対し、(4b)の“他”は「本の売り手」を表すからである。(4a)と対応する中国語は(5a)であり、(4b)と対応する日本語は(5b)である。

- (4) a. 私は彼に本を売る。
b. 我给他卖一本书。
- (5) a. 我卖一本书给他。
b. 私は彼の代わりに本を売る。

このように、中国語の“給人”と日本語の「人に」は、共通の性質を示しな

がらもずれがある。本稿では両者の違いについて、中国語の語順と絡めて考察する。

2. 授与動詞“給”と「与える」

2.1 中国語の“給”

本節では、中国語の授与動詞“給”と日本語の授与動詞「与える」の違いについて考察する。中国語の“給”は広く授与行為を表す表現で、日本語では「やる（あげる/さしあげる）/くれる（くださる）/もらう（いただく）」、「与える」、「渡す」など様々に訳し分けられる。

- (6) a. 我给他一本书。(私は彼に本をやった。)
 b. 他给我一本书。(彼は私に本をくれた。/私は彼に本をもらった。)
 c. 我们部队给了敌人一个严重的打击。(我が隊は敵に手痛い打撃を与えた。)
 d. 他的意见给我们很大的震撼。(彼の意見はわれわれに大きなショックを与えた。)
 e. 我给他一条活路。(私は彼に生活の道を与えた。)
 f. 张三给李四一支钢笔,让他写下了他的名字。(張三は李四に万年筆を渡して、名前を書いてもらった。)

中国語の“給”の特徴は次の三点にまとめられる。第一の特徴は、“給”は話し手、与え手、受け手の親疎関係や上下関係と関わりなく使えるという点である。こういった意味で、中国語の“A给B C”という表現は、「AからBにCが授与される」ということを客観的に述べる表現であると言える。

- (7) $\boxed{A} \longrightarrow \boxed{B} (\text{A给B } \boxed{C})$

第二の特徴は、授与される物は“援助”、“好感”のように受け手にとって利益となるものだけでなく、“打击”、“震撼”のように受け手にとって不利益となるものや、“刺激”“印象”のように利害の点で中立のものでもよいという点である。

第三の特徴は、授与される物は“书”、“钢笔”のような具象物だけでなく、

“打击”、“活路”のような抽象物でもよいという点である。

これに対し、日本語の「やる（あげる/さしあげる）/くれる（くださる）/もらう（いただく）」は、話し手、与え手、受け手の親疎関係や上下関係によって選択され、基本的に授与される物が受け手の利益となる具象物に制限される。

こうした特徴を根拠に、張（1993）や王（1995）は、“給”は「やる/くれる/もらう」よりも「与える」に近い表現であるとした。たしかに、制約の弱さという点において“給”は「与える」に近い性質を示す。しかし、“給”が「やる/くれる/もらう」と「与える」の両方の領域を覆う表現であるのに対し、「与える」と「やる/くれる/もらう」には一定の使い分けがある。“給”は「与える」よりも広い範囲で授与行為を表す表現である。

2.2 日本語の「与える」と「やる/くれる/もらう」

王（1995:20）は授与動詞の直接目的語に関する制約について、“給”と「与える」は具象物でも抽象物でもよいが、「やる/くれる」は具象物と一部の抽象物に限られると述べている。しかし、王は「一部の抽象物」について具体的にどのようなものなのかは説明していない。そこで本稿ではこの点について踏み込んで考察を進める。

まず、抽象物を「与える」と「やる/くれる/もらう」の両方に使われるものと、「与える」にしか使われないものとの分類する¹⁾。

- (8)a. 時間、指示、ひま、機会、許可、情報、問題（「与える」、「やる/くれる/もらう」の両方可）
- b. 印象、影響、打撃、刺激、自信、ショック、ダメージ（「与える」のみ可）

(8a)と(8b)の違いは、与え手と受け手の意志性の違いによって説明できる。まず与え手の意志から見ると、(8a)が基本的に与え手の意志によって授与されるのに対し、(8b)は与え手の意志によって授与されることもあれば、無意識のうちに授与されることもあるという違いがある。一方、受け手の意志について見ると、(8a)が受け手の意志によって受け取りを拒否できるのに対し、(8b)は受け手の意志にかかわらず付与されるという違いがある²⁾。また、(8a)は（広い意味で）与え手から受け手に所有権が移動するものであるのに対し、(8b)は元来与え手の所有物ではなく、与え手の行為の結果受け手にもたらされるものであるという違いがある。

このように、「やる/くれる/もらう」は具象物にしる抽象物にしる、所有権の

移動する場合に使われる。一方、「与える」は所有権の移動する場合にも使われるが、その意味するところは、「(与え手の行為の結果、) 何らかの具象物・抽象物が受け手にもたらされる」という点にあると考えられる。つまり、「与える」の話題の焦点は「所有権の移動」にあるのではなく、「受け手の所有」にあるのである。

その証拠に、話題の焦点が「所有権の移動」にある場合は「やる」の方が自然であるが、「受け手の所有」にある場合は「与える」の方が自然となる。(9a)は単に本の所有権を息子に譲った場面、(9b)は本の無い息子に何とかして本を持たせてやったという場面である。

(9) a. 父はいらなくなった本を息子に {[?]与えた/やった}。

b. 父はなけなしの金をはたいて息子に本を {与え/[?]やり}、学校に行かせた。

以上の結果、「やる/くれる/もらう」は与え手と受け手の双方の意志により、何らかの対象物を与え手の所有から受け手の所有に移す行為であり、「与える」は与え手や受け手の意志とはかかわりなく、与え手の行為の結果、受け手に何らかの影響を付与する行為であることが明らかとなった³⁾。

ここで再び中国語の“給”に話を戻す。“給”は日本語の「与える」、「やる/くれる/もらう」、さらには「渡す」の領域を覆う非常に意味領域の広い授与動詞である。先に(7)の説明で、中国語の“A給BC”は、「AからBにCが授与される」ことを客観的に述べる表現であると説明した。しかし、正確に言うならば、中国語の“A給BC”は「Aの行為の結果、BにCが授与される」ということを客観的に述べる表現であると説明される。こうした客観的な意味を持つ授与動詞“給”が、文脈や語順により様々な“給人”の用法となって現れると考えられる。

3. “S+給人+VO”構文と“SVO+給人”構文

日本語の「私は彼に手紙を書く」は、中国語では“我给他写信”と訳すこともできるし“我写信给他”と訳すこともできる。しかし、形式が違う以上、二つの中国語の意味は違うはずである。そこで本節では、中国語の“S+給人+VO”構文と“SVO+給人”構文の違いについて考察する。

3.1 “S+給人+V O”構文

まず、“S+給人+V O”構文から考察する。例文(1)に示した通り、中国語の“我給他写信”は「私は彼に手紙を書く」の意味で使われることが多い。しかし、文脈によっては「私は彼の代わりに手紙を書く」の意味にもなる。前者の場合“他”は手紙の受け手となるが、後者の場合“他”は代筆の依頼人となる。

- (10) a. 我給他写信。
 b. 私は彼に手紙を書く。
 c. 私は彼の代わりに手紙を書く。

同様に“我給他打电话”(電話をかける)、“我給他寄信”(手紙を出す)、“我給他发传真”(ファックスを送る)なども、文脈により「彼に」と「彼の代わりに」の両方の意味に解釈される。これにより、“S+給人+V O”構文の“給人”には、行為の受け手を表す用法と、行為の代行の受け手を表す用法のあることが分かる。

“S+給人+V O”構文の“給人”には、これ以外にも様々な用法がある。たとえば、“我給他买书”の“他”は「本の受け手」と解釈されるのが普通である。しかし、たとえば“他”は売れない本屋で、その彼のために本を買ってあげるといふ文脈では、“他”は「本の売り手」と解釈される。この場合、“給他”は「(本屋である) 彼のために」という意味になる。

このように、“S+給人+V O”構文の“給人”は、「人に」、「人の代わりに」、「人のために」など様々な意味で使われる。この点について、本稿では、“S+給人+V O”構文の“給人”は、これらを抽象化した「行為の結果生じる何らかの影響の受け手」を表すと考える。これが文脈によって「人に」、「人の代わりに」、「人のために」など、様々な用法となって現れるのである⁴⁾。たとえば“我給他写信”の場合、行為の結果が手紙の受け手に影響する文脈では「私は彼 {に/のために} 手紙を書く」という意味になり、行為の結果が代筆の依頼人に影響する文脈では「私は彼 {の代わりに/のために} (誰かに) 手紙を書く」という意味になる⁵⁾。

日本語の「人のために」は広く利益の受け手を表すが、中国語の“給人”はさらに広く何らかの影響の受け手を表す。第一に、「人のために」がその人にとって何らかの利益となる場合にしか使われないのに対し、“給人”は利益・不利益・中立のいずれの場合にも使えるという違いがある。第二に、「人のために」が与え手の意志的な行為にしか使えないのに対し⁶⁾、“給人”は与え手の意志とは無関係に使えるという違いがある。

- (11) a. 我給他留下了深刻的印象。
 b. 私は彼に強烈な印象を与えた。
 c. *私は彼のために/の代わりに強烈な印象を与えた。

その他、“S + 給人 + VO”構文には(12a)(13a)のように使役を表す用法もある⁷⁾。この場合の“給他”は薬を飲ませたり服を着せるという使役行為の受け手を表している⁸⁾。また、(14a)は文脈により能動の意味にも使役の意味にもなる。しかし、いずれの場合にも“給我”はそうした行為の影響が「私」に向けられていることを表しているという点で共通している。

- (12) a. 我給他吃药了。
 b. 私は彼に薬を飲ませた。
 (13) a. 我給他穿衣服。
 b. 私は彼に服を着せた。
 (14) a. 你給我看看吧。
 b. ちょっと (私のために) 見て下さい。
 c. ちょっと (私に) 見せて下さい。

結局、“S + 給人 + VO”構文は、授与動詞構文“A給BC”の延長として考えることができる。すなわち、“A給BC”の“C”を“VO”に置き換えたのが“S + 給人 + VO”構文なのである。“我給他信”の場合に“我”から“他”へ“信”が授与されるのと同様に、“我給他写信”では“我”から“他”へ“写信”という行為の影響が授与される。その影響が手紙の受け手に及ぶ場合には「私は彼に手紙を書く」という意味になり、代筆の依頼人に及ぶ場合には「私は彼の代わりに手紙を書く」という意味になる。

- (15)
- $$\boxed{A} \xrightarrow{\boxed{VO}} \boxed{B} \quad (A \text{ 給 } B \boxed{VO})$$

以上、“S + 給人 + VO”構文の“給人”は、広く「行為の結果生じる何らかの影響の受け手を表す」と説明される。

3.2 “SVO + 給人”構文

次に“SVO + 給人”構文について考察する。すでに見た通り、“我給他写信”は文脈により「私は彼に手紙を書く」の意味にもなるし、「私は彼の代わり

に手紙を書く」の意味にもなる。一方、“給他”をSVOに後置した“我写信給他”は、「私は彼に手紙を書く」という意味にしかない。

- (16) a. 我写信給他。
 b. 私は彼に手紙を書く。
 c. *私は彼の代わりに手紙を書く。

同様に“我打电话給他”、“我寄信給他”、“我发传真給他”なども「彼に～する」の意味にしか解釈されない。これにより、“SVO+給人”構文の“給人”は、行為の受け手を表すことが分かる。

しかし、“SVO+給人”構文はどのような行為にも使えるわけではない。次の例において“我唱歌”、“我动手术”、“我留下了深刻的印象”の結果、“他”は何らかの影響を受ける。しかし、こうした行為は“SVO+給人”構文には使えない。

- (17) a. 我給他唱歌。
 b. *我唱歌給他。
 c. 私は彼のために歌を歌う。
 (18) a. 我給他动手术。
 b. *我动手术給他。
 c. 私は彼に手術をする。
 (19) a. 我給他留下了深刻的印象。
 b. *我留下了深刻的印象給他。
 c. 私は彼に強烈な印象を与えた。

そこで“SVO+給人”構文に使われる動詞を見てみると、“打(電話)”、“寄”、“发(传真)”のほか、“传”(伝える)、“递”(手渡す)、“交”(渡す)のように物や情報の伝達を表す動詞であることが分かる。これにより、“SVO+給人”構文の“給人”は「物や情報の受け手を表す」と結論することができる。“我写信給他”が成立するのも、“写”が「書き送る」という意味で解釈されるためである。

ところで、上の(16a)は文脈によっては「私は彼のために手紙を書く」と訳すこともできる。ただし、それは「手紙を書くことが彼の利益になる」という文脈によるものであり、“給他”自体はあくまでも手紙の受け手を表している。

以上考察してきたように、同じ“給人”でも“S+給人+VO”構文の“給

人”と“SVO+給人”構文の“給人”では性質に違いがある。前者の“給人”が「行為の結果生じる何らかの影響の受け手」を表すのに対し、後者の“給人”は「物や情報の受け手」を表すのである。

3.3 “S+給人+VO”構文と“SVO+給人”構文の合成

喜多山(2001)は、“S+給人+VO”構文と“SVO+給人”構文の両方に使われる動詞として、“传”、“递”、“寄”、“说”を挙げ、「一方からもう一方へという方向性がうかがえます。そのことからこれら動詞の目的語である物や伝達物が“給”に続く受け取り手に向かって移動することになります」(pp.137-138)と述べている。これは“S+給人+VO”構文に使われる動詞が、“人”に何らかの影響を与えるものであれば広く許容されるのに対し、“SVO+給人”構文に使われる動詞は、物や情報の伝達を表すものに限られるためであると説明できる。

ところで、日本語の「私は彼の代わりに手紙を書く」と「私は彼のお母さんに手紙を書く」を一つにすると、「私は彼の代わりに、彼のお母さんに手紙を書く」という文になる。しかし、中国語の“我给他写信”と“我写信给他的妈妈”を一つにした“我给他写信给他的妈妈”は不自然な文となる。

- (20) a. [?]我给他写信 给他的妈妈。
 b. 我替他写信 给他的妈妈。
 c. 私は彼の代わりに、彼のお母さんに手紙を書く。

次の例も同様である。

- (21) a. [?]我给他 给他的妈妈写信。
 b. 我替他 给他的妈妈写信。
 c. 私は彼の代わりに、彼のお母さんに手紙を書く。

“給”の連用は意味が取りにくくなる。そのため、初めの“給”は“替”に変える必要がある。

4. 中国語の“买卖”と日本語の「売買」

同じ売買と関わる行為でも“我给他买了一本书”と“我买了一本书给他”が

ほぼ同じ意味になるのに対し、“我給他买了一本书”と“我买了一本书給他”とでは全く違う意味になる。この点について日本語の「売る」、「買う」と対照しながら考察する。

まず“买”の場合、“我給他买了一本书”も“我买了一本书給他”も「私は彼に本を買う」の意味で解釈されるのが普通である。いずれの“給他”も「本の受け取り手」を表す点で共通している。

- (22) a. 我給他买了一本书。
 b. 私は彼に本を買った。
 (23) a. 我买了一本书給他。
 b. 私は彼に本を買った。

両者の違いは、(22a)が「彼への利益」に焦点が当たっているのに対し、(23a)は「本を買って、それを渡した」のように「本の移動」に焦点が当たっている点にある。両者を訳し分けるとすれば、前者は「私は彼のために本を買った」、後者は「私は彼に本を買い与えた」となる。

“我給他买了一本书”の“他”は、“我”が本を買うことによって何らかの影響を受ける人を表す。そのため、「本の受け取り手」だけでなく「本の売り手」を表す可能性もある。たとえば、彼は売れない本屋で、その彼のために本を買ってあげるといった特殊な文脈では、“他”が「本の売り手」を表すこともある。

次に“卖”の場合、“我給他买了一本书”と“我买了一本书給他”では明らかに意味に違いがある。なぜならば、前者の“他”が「本の売り手」を表すのに対し、後者の“他”は「本の買い手」を表すからである⁹⁾。

- (24) a. 我給他卖了一本书。
 b. 私は彼の代わりに本を売った。
 (25) a. 我卖了一本书給他。
 b. 私は彼に本を売った。

“我給他卖了一本书”の“給他”は、「私」が本を売ることによって何らかの影響を受ける人を表す。そのため、「本の売り手」だけでなく「本の買い手」を表す可能性があってもよさそうである。しかし、実際にはこの“給他”が「本の買い手」を表すことはない。「私はこの本を売りたくないけど、彼があまりにも熱心に頼むから売ってあげた」という意味には取れないのである。このことから、“我給他卖了一本书”の“給他”は、買い手への影響は考えていないこと

が分かる。

一方、日本語の「私は彼のために本を売った」の「彼」は、「本の売り手」の可能性もあるし「本の買い手」の可能性もある。このことから、中国語の“給人”と日本語の「人のために」は異なる性質を持つことが分かる。

5. “給人”と「人に」/「人のために」

“S + 給人 + VO”構文の“給人”は「行為の結果生じる何らかの影響の受け手」を表し、“S VO + 給人”構文の“給人”は「物や情報の受け手」を表す。そのため、前者は日本語の「人のために」に近い表現となり、後者は「人に」に近い表現となる。しかし、これら二組の中国語と日本語は完全に一対一に対応しているわけではない。本節ではこの点について考察する。

5.1 「人に」と「人のために」

すでに論じたように、中国語の“S VO + 給人”構文は、物や情報の伝達を表す“寄”や“发”などの動詞とともに使われる。この“給人”は物や情報の受け手を表し、日本語では「人に」と訳される。“S VO + 給人”構文は、物や情報が動作主から相手へと伝達される場合にのみ使われるのであり、広く行為の受け手を表すことはできない。

- (26) a. 我给他寄信。
 b. 我寄信给他。
 c. 私は彼に手紙を送る。
- (27) a. 我给他发传真。
 b. 我发传真给他。
 c. 私は彼にファックスを送る。

一方、“S + 給人 + VO”構文は、行為の結果生じる何らかの影響の受け手を表す場合に広く使うことができる。この“給人”は日本語では「人に」と訳されることが多く、恩恵の意味を強調する場合に「人のために」と訳される。このことから、日本語の「人に」は物や情報の伝達以外にも、広く行為の受け手を表す場合に使えることが分かる。

- (28) a. 我给他找工作。

- b. *我找工作給他。
 c. 私は彼のために/に仕事を探す。
 (29) a. 我給病人动手术。
 b. *我动手术給病人。
 c. 私は病人のために/に手術をする。
 (30) a. 我給他做饭。
 b. *我做饭給他。
 c. 私は彼のために/にご飯を作る。
 (31) a. 我給女儿命名为“丽君”。
 b. *我命名为“丽君”給女儿。
 c. 私は娘のために/に「麗君」と名付けた。

しかし、次の場合には「人のために」は使えるが、「人に」を使うことはできない¹⁰⁾。

- (32) a. 我給他帮忙。¹¹⁾
 b. *我帮忙給他。
 c. 私は彼のために/*に手伝う。
 (33) a. 我給他打扫房间。
 b. *我打扫房间給他。
 c. 私は彼のために/*に部屋を掃除する。
 (34) a. 我給他洗衣服。
 b. *我洗衣服給他。
 c. 私は彼のために/*に洗濯する。
 (35) a. 我給他扫墓。
 b. *我扫墓給他。
 c. 私は彼のために/*に墓参りする。

(28～31)と(32～35)の違いは、前者の「仕事」、「手術」、「ご飯」、「名前」が受け手に具体的な形として直接授与されるものであるのに対し、後者の「手伝い」、「掃除」、「洗濯」、「墓参り」は、行為の結果生じる影響（恩恵）として付与されるものであるという点にある。

5.2 授受補助動詞構文

こうした違いは授受補助動詞構文にも現れる。「てやる」構文の場合、「人に」

は「手紙を送る」や「仕事を探す」とは共起するが、「仕事を手伝う」との共起は不自然である。これは格助詞「に」が動作の着点を表すことに由来すると思われる¹²⁾。すなわち、(36)(37)の場合、行為の結果「手紙」や「仕事」が「彼」のもとにもたらされるが、(38)の場合、行為の結果「彼」に「仕事」がもたらされるわけではない。そのため、「彼」に着点としての意味役割が付与されにくいのである。

- (36) 私は彼のためにに手紙を送ってやる。
 (37) 私は彼のためにに仕事を探してやる。
 (38) 私は彼のためにに仕事を手伝ってやる。

一方、「てもらう」構文の場合、「彼に～てもらう」は(39)～(41)の全てに使えるが、「彼から～てもらう」は順に許容量が落ちる。格助詞「から」は動作の起点を表すが、このことからこれらの「彼」は順に起点としての役割を失っていくことが分かる。言い換えると、これらの行為は順に着点を意識しなくなっていくのである。

- (39) 私は彼にから手紙を送ってもらう。
 (40) 私は彼にから仕事を探してもらう。
 (41) 私は彼にから案内してもらう。

なお、(42)(43)は「人に～する」は使いにくい、「人に～してやる」なら使える。歌声やピアノの音は、「言う」や「教える」のように情報を伝達するものではない。しかし、音声として相手に伝わり、相手の気持に影響を与えるため、授受補助動詞構文にして恩恵の意味が出るようにしてやると、使えるようになるのである。

- (42) a. 我給他唱歌。
 b. *我唱歌給他。
 c. 私は彼のためにに歌を歌う。
 d. 私は彼のためにに歌を歌ってやる。
 (43) a. 我給他弹钢琴。
 b. *我弹钢琴給他。
 c. 私は彼のためににピアノをひく。
 d. 私は彼のためににピアノをひいてやる。

以上、日本語の「人に」は物や情報のほか広く何らかの影響の受け手を表すが、授与される物は具象物にしる抽象物にしる、受け手に具体的な形として直接授与されるものでなければならぬことが明らかとなった。

さて、例文(11)のところで論じたように、「人のために」が与え手の意志的な行為にしか使えないのに対し、“給人”は与え手の意志とは関係無く使える。ただし、その場合に使えるのは“S + 給人 + VO”構文に限られる。

- (44) a. 我給他留下了深刻的印象。
 b. *我留下了深刻的印象給他。
 c. *私は彼のために強烈な印象を残した（与えた）。
 d. 私は彼に強烈な印象を残した（与えた）。

一方、同じ“留”でも意志的な場合には、“S + 給人 + VO”構文にも“SV O + 給人”構文にも使える。

- (45) a. 我給他留一点菜。
 b. 我留一点菜給他。
 c. 私は彼のために料理を残した。
 d. 私は彼に料理を残した。

この場合の“留”は満腹で「食べ残す」という意味ではなく、相手のために料理を「取っておく」という意味である。相手に対する授与の意味が入るため「人に」を使うことができるのである。

6. まとめ

以上の考察の結果をまとめると次のようになる。

【授与動詞の意味】

“A 給 B C”

「Aの行為の結果、BにCが授与される」ということを客観的に表す
 「やる/くれる/もらう」

与え手と受け手の双方の意志により、何らかの対象物を与え手の所有から受け手の所有に移すことを表す

「与える」

与え手や受け手の意志とはかかわりなく、与え手の行為の結果、受け手に何らかの影響を付与することを表す

【“給人”、「人に」、「人のために」の意味】

“S + 給人 + VO” 構文の“給人”

行為の結果生じる何らかの影響の受け手を表す

“SVO + 給人” 構文の“給人”

物や情報の受け手を表す

「人のために」

利益の受け手を表す

「人に」

物や情報のほか広く何らかの影響の受け手を表す

(ただし、授与される物は具象物にしる抽象物にしる、受け手に具体的な形として直接授与されるものでなければならない)

最後に、上記の構文を離れた“給人”単独の意味は、「物」、「情報」、「何らかの影響」を抽象化した、広い意味での「何らかの受け手」を表すことにありと考えられる。しかし、それは意味としては非常に稀薄なものとなる。“給人”は“S + 給人 + VO”、“SVO + 給人”といった構文の中ではじめて具体的な意味をもって機能するのである。

注

- 1) (8a)の中には「やる」は使いにくい、「くれる/もらう」なら使えるものも含まれる。たとえば、「指示をやる」は不自然であるが(普通「指示を与える」と言う)、「指示をくれる」、「指示をもらう」なら自然に使うことができる。
- 2) 森田(1989)は「与える」の諸用法の説明で、与え手の意志については記述しているが、受け手の意志については記述していない。
- 3) 森田(1989)は「与える」全般の意味について、「主体者Aが、自己に属する事物Cを、相手Bの側へと移す行為」(p.44)と説明しているが、授与される物は必ずしも与え手に所属しているとは限らない。
- 4) 呂(1980)をはじめ、先行研究では“給”が“替”(～の代わりに)や“为”(～のために)の意味で使われると記述されている。しかし、“給”自体に

- “替”や“为”の意味があるわけではない。
- 5) 利益の意味が強い場合に「彼のために」と表現される。
 - 6) 大曾(1983:123)は、「[~のために]」と言う句は、どんな場合にも授動詞と共起し得るようだが、この句は好意の与え手が受け手を意識して、意図的に行う行為としか使えない」と指摘している。
 - 7) 張(1993)は、中国語の動詞のうち飲食類(“吃, 喝”など)、着脱類(“穿, 戴, 脱”など)、感覚作用を表す他動詞(“看, 听, 闻, 尝, 摸”など)を「再帰動詞」と呼び、「再帰動詞」が“給~+動詞”構文に用いられた場合、「手助け」の意味を持つ他動詞として機能することがあると指摘している。
 - 8) “給”は“让”や“被”で言い換えられる場合もある。しかし、“给”自体に使役や受身の意味があるわけではない。泉(1984)では“给”と“让”、“被”の統語的な違いについて論じてられている。
 - 9) 盧(1993)は“张三卖一本书给李四”の文法性判断を「?」とし、“张三卖给李四一本书”が自然な表現であるとしている。盧はその理由について、「「卖」は売り手(動作主)と買い手(受け手)が共に関与して、達成できるイベントであり、「送」のような一方的な行為ではなく、「给」をつけて、その受け手を表示するものだが、共演する受け手がイベントと直接かわっているため、語順上隣接することになる」(p.64)と述べている。しかし、本稿の北京出身のインフォーマント5人は、全員どちらの文も自然であると答えている。
 - 10) 例文³²⁾は「彼」に対する処置を表すため「彼を」も成立する。
 - 11) “我给他帮忙”は北京出身のインフォーマント5人は全く問題無いと答えているが、台湾出身のインフォーマント5人と大連出身のインフォーマント5人は不自然な表現であると判断している。大連や台湾では“我帮他的忙”と言うのが普通である(北京では両方言える)。一方、“我给他打扫房间”や“我给他洗衣服”は北京、大連、台湾のいずれでも使えるということである。この点について、方言差からも分析できそうである。
 - 12) 格助詞「に」は「~に行く」、「~に話す」、「~に教える」のほか、「~にもらう」、「~にされる」も含め、広い意味で動作の着点を表すと考えられる。詳細は杉村(1999)で論じた。

参考文献

- 泉 敏弘 (1984) 「“給” 字的致使, 被动用法研究」『中國語學』231, pp.60-68, 中国語学会.
- 王 怡 (1995) 「中国語話者に見られる「与える」、「やる/くれる」の誤用とその分析」『ことばの科学』8, pp.13-31, 名古屋大学言語文化部言語文化研究委員会.
- 大曾美恵子 (1983) 「授動詞文と二名詞句」『日本語教育』50, pp.118-124, 日本語教育学会.
- 喜多山幸子 (2000) 「話を伝える相手は?」, 相原茂他 (著) 『中国語教室 Q & A 101』, pp.136-138, 大修館書店.
- 杉村 泰 (1999) 「認知イメージに基づく格助詞の指導」『日本語学習者の作文コーパス: 電子化による共有資源化』平成8年度~10年度科学研究費補助金(基礎研究(A)(1)) 研究成果報告書(研究課題番号 08558020) 研究代表者 大曾美恵子, pp.103-118.
- 張 威 (1993) 「中国語再帰動詞及びその特殊用法 —— “給~+再帰動詞” をめぐって——」『中京大学教養論叢』34-2, pp.135-159, 中京大学教養部.
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』, 角川書店.
- 呂 叔湘 (主編) (1980) 『現代汉语八百詞』, 商务印书馆.
- 盧 涛 (1993) 「「給」の機能語化について」『中國語學』240, pp.60-69, 日本中国語学会.